

新型コロナで開催途中で中止となった展覧会をもう一度・・・

古川美術館 分館爲三郎記念館 両館同時開催 特別展

## 再開催！愛知の工芸2020

2020年9月12日(土)～10月11日(日)



### 展覧会のご案内

各位

平素は格別のご厚情を賜りありがとうございます。

この度、2020年3月に新型コロナウイルスの感染拡大防止の処置として発令された政府の緊急事態宣言をうけ、会期半ばで短縮開催となった「愛知の工芸2020」を再び開催します。

「愛知の工芸 2020」展は66名の工芸作家を古川美術館と分館爲三郎記念館の両館にて一堂に紹介する内容で、出品されたすべての作品はいずれも作家の代表作でした。その渾身作を今一度、世に送り出したいと願い、開催いたします。

是非とも貴媒体にてご紹介いただきたく、お願い申し上げます。

古川美術館主催 **愛知の工芸展とは・・・**

2015年 「メイドイン愛知」として第1回目を工芸作家14名にて開催  
コンセプトは**愛知県産**の工芸品  
《招聘作家》  
(陶芸) 加藤令吉、太田公典、梅田洋、寺田鉄平、岩淵寛、鯉江廣、山田想  
(七宝) 柴田明 太田吉亮 (漆芸) 鶴飼敏伸 安藤源一郎  
(諸工芸) 名倉鳳山 二村純生 川口清三

2020年 「愛知の工芸2020」として開催決定。  
3月 コンセプトは**素材へのこだわり**  
今回は**作家**に光をあて紹介

## -----2回目のこだわり-----

日展の加藤令吉氏、伝統工芸展の名倉鳳山氏、染織では人間国宝土屋順紀氏、若手の発掘では愛知県芸術大学教授の梅本孝征氏に作家を推薦してもらい、古川美術館で厳選した66名を招聘。  
出品作家には出品規定を定め、その規定の中で代表作の出品を依頼。どの作家も同じ条件で見られるから比較しやすい！

2020年 新型コロナウイルスの感染拡大防止の処置として発令された政府の緊急  
4月 事態宣言をうけ、会期半ばで休館。(4月10日まで)

2020年 会期中で休館となった展覧会を再び開催することに決定  
7月 新型コロナ第二派に備え開館を維持できるよう、開館形態、  
イベントスタイルなどを見直し、開催へ向け準備

## 新型コロナウイルス対策

新型コロナウイルス感染拡大防止に伴い、ギャラリートーク、アーティストトークなどのイベントの開催は見合わせます。新しい生活様式に即した、3密をさけたイベント方式を実践していきます。

### ギャラリートークの代わりに担当学芸からの見どころ紹介

#### 【解説サンプル】

加藤令吉は一貫して力強い陶芸を追求してきた。有機的なフォルムを黒い釉薬で覆い、全体に掘りで凹凸を作り作品に細かな光の反射を生んでいる。中央には作者の代名詞でもある「青」の釉薬、そして光を表現する金彩が施されている。加藤令吉は1980年代に土の質感を追求し、掘りにより装飾を試みてきた。その後、金属を使った華麗な釉色の装飾技法を研究している。本作はまさにその世界観が融合した作品である。土の質感と釉薬の美しい発色、素材に挑戦し追求した作家の姿が作品から感じられる。



新しい鑑賞方法のサンプル  
加藤令吉「宙—光幻—」

### アーティストトークの代わりに先生のボイスメモ

新型コロナウイルス感染拡大防止に伴い、飛沫飛散と3密が懸念されるアーティストトークの代わりに、ご自身のスマホ&携帯で先生方のトークやメッセージを展示室内のQRコードから受け取れます。ぜひご利用ください。



なぜ古川美術館で「愛知の工芸」を？

**愛知の工芸展開催のきっかけ . . . .**

**《愛知県のすごい！》を展示にしてみたい！という思い**

### 《すごい①》

#### ものづくりを支えた豊富な資源

愛知県は自然に恵まれた広大な土地があり、瀬戸の陶土、三河の石など豊富な資源が採取できました。豊かな資源もものづくり大国となった要因の一つといえるでしょう。

#### 土壌に恵まれた瀬戸

瀬戸は長きにわたり、やきものに適した陶土・釉薬の原料・薪など豊富な資源に恵まれ、やきものの町として発展してきた。地質学的には、新第三紀鮮新紀(約700万年から300万年前頃)に、淡水湖であった東海湖及び古琵琶湖に堆積してできた蛙目粘土と木節粘土という慮質な粘土が豊富に産出する。この粘土の大きな特徴は鉄分がほとんど含有されていないこと。そのため素地の白い焼き物をつくることができたのである。加えて鉄分や不純物が少ない土は粘りがあって成形しやすく、焼成温度も高いため、瀬戸窯は中国の白磁や青磁をモデルに多種多様な製品の生産が可能になった。こうした優れた陶土を豊富に産出した瀬戸は、他の窯業地にはない製品を作る出すことができたのである

### 《すごい③》

#### ものづくりを支えた立地条件

日本の中央に位置する愛知県は東西の領域へのアクセスに優れており、さらに大都市東京と大阪をつなぐ都市として交通の便も早くから発展してきました。また大きな港があったため、物流が充実し、作ったものなどを関東、関西へ展開できる好立地の後ろ盾があったからといえます。

### 《すごい②》

#### 豊富な伝統工芸品

《モノづくり》都市として全国にその名を誇る愛知県ですが、歴史的に中部は古くからモノづくりの盛んな地域でした。それを証明するのが、経済産業大臣が指定する伝統工芸品で、現在その数は全国で222点。うち愛知が12点(全国5位)、今も多くの作家が活躍しています。このように工芸品が盛んになったのは、自然に恵まれた広大な土地があり、豊富な資源が採取できたことと合わせ、できたものを関東、関西へ展開できる好立地の後ろ盾があったからといえます。

### 《すごい④》

#### 条件のそろった育成環境

なんといっても陶芸王国  
六古窯のうち2つを所有するのは愛知県のみ。  
ここ愛知県には陶芸を専門に学べる高校が瀬戸と常滑にあり、さらに窯業訓練校もある。古くから続く窯元もあり、修行するには最高の環境です。また愛知県立芸術大学をはじめ、芸術大学も多数あり、特色ある教育が受けられることも魅力です。

初代館長・古川爲三郎がやっていた作家育成の精神にのっとり

このすごい！環境の中で活躍する作家を年齢、賞歴問わず一人でも多く紹介することが目的。

お問い合わせは古川美術館 学芸課まで 052-763-1991

## ジャンルで見る愛知の工芸2020 —陶芸—

なんといっても陶芸王国  
六古窯のうち2つを所有するのは愛知県のみ

### —東海のやきものの歴史はここから始まった— 瀬戸

東海地方における焼き物の母体は5世紀ごろに築窯した猿投窯であった。その猿投窯の流れをくんで瀬戸窯は10世紀に誕生。室町時代になると瀬戸窯では釉薬の研究が盛んに行われており、これまでとは異なる焼き物が生産され、北は北海道、南は九州と全国規模で焼き物が流通し、その中心にあったのが瀬戸窯であった。その後、江戸時代に入ると瀬戸は美濃に生産地域を移しながら連房登窯を築窯し、さらに、黄瀬戸、瀬戸黒、志野、織部といったこれまでは想像つかないほどの美しい釉を開発し、瀬戸の窯業は一層盛んになっていく。鎖国が解け、海外への輸出が可能になった明治では、焼き物も豪華絢爛となり世界各国へ輸出。日本の高い技術は焼き物を介して世界に発信されたのである。



図1：加藤令吉「宙一光幻」

### —最古で最大規模の窯、力強い壺の歴史はここから— 常滑

猿投窯の南部に位置する常滑窯の母体も瀬戸と同様に猿投窯である。築窯当初は瀬戸と同様、穴窯による雑器を生産ラインの中心に据えていたが、戦国時代の16世紀には大窯(おおがま)に改良され、壺や甕などの大型の焼き物が中心となる。また鉄砲の普及により大型の壺は火薬原料の貯蔵具として使われていたとも言われている。さらに室町時代になると、お茶を飲むことが普及し、お茶の葉を貯蔵するのに活躍していた。江戸時代には真焼物という硬く焼き締まったものと現在の朱泥のような赤物と呼ばれる柔かな素焼が作られるようになる。真焼物は甕や壺が中心で、その他に徳利や急須。一方、赤物は甕のほかには火消壺、蛸壺、焜炉(こんろ)や蚊遣りなどがつくられるようになり、瀬戸とは異なった生活に密着していた焼き物として発展を遂げてきたのである。



図2：鯉江廣「あけぼの彩輪形文鉢」

## ジャンルで見る愛知の工芸2020 —尾張七宝— 透明感の高さとジャポニズムの文様で世界を魅了した

七宝焼の歴史は紀元前までさかのぼるが、ここ、愛知県で再興されるようになったのは、天保年間(1830年頃)。尾張国の梶常吉が、オランダ七宝の皿を手がかりにその製法を発見し、改良を加えたのが始まりとされている。尾張七宝を一言で例えると、「緻密な技術、巧の技の結集」といえる。

陶磁器のように土を成形して焼き上げる焼物とは違い、七宝焼は銅又は銀の金属素地を用い、その表面にガラス質の釉薬を施し、花鳥風月、風景などの図柄をあしらったところに特徴があり、特に図柄の輪郭になる部分に銀線を施す有線七宝は尾張七宝の代表的な技術である。尾張の地で梶常吉によって広められた七宝は、「近代七宝」の始まりとさえ言われており、以降七宝は尾張で盛んに制作されるようになった。幕末には尾張の特産品として認識されるまでになり、尾張七宝は、現在まで継承・発展してきた、日本の七宝の本流といえる。



図3：太田吉亮「蒼流」

## ジャンルで見る愛知の工芸2020 —小原和紙—

現・豊田市小原地区では、室町時代から冬の仕事として「紙すき」が行われてきた。自然豊かなこの地区はコウゾの木の育成に適しており、明治から大正時代には「三河森下紙」という傘用の紙や障子紙などを多く生産する「和紙の村」として定着する。昭和初期、時代の変化とともに和紙の需要が減り、実用品としての伝統的な和紙は衰退していきしたが、和紙そのものを美術作品とする小原和紙が誕生し、工芸の世界に新たな息吹を与えたのである。小原和紙は和紙原料のコウゾを染色し、それを絵具代わりに絵模様を漉き込んでゆく美術工芸品。絵画的に和紙をすくこの美しい世界観は、ほかの紙芸にはない可能性を秘めた分野といえるのである。

## ジャンルで見る愛知の工芸2020 —硯— 開山1300年！！漆黒の美

愛知県、奥三河新城市、そこには1300年も伝わる愛知の芸術があった。開山1300年の鳳来寺山周辺からは、金鳳石、鳳鳴石、煙巖石という三種の石が産出する。それを活かして始まったのが硯の生産。その始まりは鎌倉時代、あるいは室町時代と考えられ、江戸になるとその勢いはますます盛んになり、奥三河の名産ともなり、一度は衰退したものの、歴代名倉鳳山によってその技術の復活を果たす。硯は他の工芸品に比べ、色もなく形もその用途からいって自ずから制約を受け、個人的に意図表現するという事は大変難しい類のもの。反面、工芸の見地からすれば、素材からくる様々な制約はかえって究極の表現への一途の道となる可能性を秘めている。堅い天然石からできていながら、体内に水をたたえているかのような潤いある漆黒。滑らかで、それでいて鋭く、広がりを持ちながら完結された形。硯は、機能美とも美術品の美とも異なる独特の美しさを宿した、まさに工芸の真髄を携えた分野といえるのである。

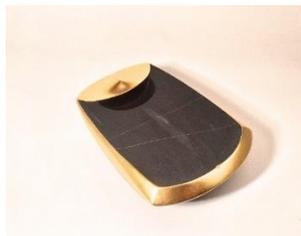


図4：名倉鳳山「光陵硯「Maschera inca」」



図5：加藤英治「宙」

## ジャンルで見る愛知の工芸2020 —漆芸—

古来より伝わる日本最古の塗料

「japan」には「漆」「漆器」という意味がある。これはかつて漆器が日本の代表的な輸出品だったころの名残であり、英語では「china」が中国・陶磁器を意味するのと同様に、「japan」は日本の漆器・漆芸品を指す。日本という温暖湿潤な気候の中で育った漆の木から採取される日本漆は、日本の気候と日本人の美意識、そして匠の技によって手を加えられてきた分野である。漆は、古くは福井県鳥浜貝塚から縄文時代前期と考えられる朱塗りの櫛が見つかるなど、装身具や容器の塗料として利用されてきた。漆を塗ることで接着剤にもなり、防水性・耐熱性・耐久性が高まる。何よりも美しい深みのある色が生まれるのである。独特の質感、光沢とあたたかみやわかみのある手ざわり、気品に満ちた 風格がある漆芸は、JAPANという英名からわかるように、日本の伝統文化を代表するものである。



図6: 安藤源一郎「紙胎蒔醬翠嵐丸盆」

## ジャンルで見る愛知の工芸2020 —染織—

細部は美に宿る。織と染の生み出す精緻な世界

染織は日本の歴史に深くかかわり発展を遂げている。人々の衣類として、あるいは住居の素材としてその時代の生活様式に沿って形を変化し続けてきた。生活の中での必需品だった染織も生活にゆとりが生まれるとアート志向の強い上質なものが求められるようになる。さらに、人工素材が開発されるとこれまでの自然素材と組み合わせるコントラストを強調した新しい表現の展開をみせるようになった。その魅力は作家の目的に合わせた素材選定と美しい色彩に染め上げる技術、織りなす美しいパターンあるいは文様である。染織には布を織りあげる前に染色をする先染織物と製織後に染色する後染織物がある。本展では先染織物は着物に多くみられ、糸本来の美しさとたて糸とよこ糸が織りなす美しく繊細な文様を楽しむことができる。一方で後染織物は額装染織作品にみられ、絵画的な表現から作家のインスピレーション、発想力をダイレクトに堪能できる。



図7: 石上久美子  
「夜の浮遊」



図8: 神谷あかね  
「生絹着物—光の音—」

## 出品作家

作家の来館日は作家名の隣をご覧ください。ただし作家都合による変更する場合がございます。あらかじめご了承ください。

陶芸				染織				七宝		漆芸	
明石 朋美	近藤 葉子 9/27	宮下 陽 9/27	石上久美子	新野 素子 9/13	池田 貴普 9/12	浅井 啓介 9/20					
伊藤 公洋	小枝 真人	宮部 友宏	磯 緋佐子	二宮 祐子 9/21	太田 吉亮	安藤源一郎					
岩渕 寛	酒井 智也	森 克徳	伊部 英子	早川 嘉英	柴田 明	則義					
梅田 洋	佐藤 文子	屋我 優人	上田 章子 9/26	古田 好孝		鶴飼 敏伸					
梅本 孝征 9/12	高山 愛	山口 真人	小山田尚弘	間瀬 邦子		丹羽 清美					
梅村 拓生	竹内孝一郎	矢作 薫	加藤 玲	吉田美年子							
太田 公典	田中 良和		神谷あかね	渡会 清子							
大谷 昌弘	樽田 裕史		久野 剛資								
岡崎 達也	寺田 鉄平		小林 敬子								
加藤 令吉 9/12・適宜	富田 亮 9/19		小林佐智子 9/26								
柄澤 あかり	波多野正典 9/20		杉浦 雅子								
鯉江 廣	前田 正剛		多々内都子								
小林 由依	水野 真澄		永田 敏美								

**広報使用画像** 本資料の中の画像、もしくは出品作家の一覧よりご自由にお選びください。

◆古川美術館

担当学芸員: 林 奈美恵 電話: 052-763-1991

mail: n\_hayashi@furukawa-museum.or.jp

お問い合わせは古川美術館 学芸課まで 052-763-1991

## お茶会の代わりに

映像で楽しむ

新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となったお茶会をバーチャルで再現します。  
出品作家が協力し合い、制作した茶箱を使ったお点前のデモンストレーションを映像でお楽しみください。

再びお茶会ができることを願ひ、新時代のお茶会を体験ください。

## #茶箱点前



川口清三「枳茶箱・黒布茶巾・松風」/ 前田正剛「茶碗」  
梅本孝征「振り出し・茶巾筒」/ 永田敏美「仕覆（茶碗）」/ 藤岡敏伸「栗・茶筌筒」  
小林敏子「仕覆（棗）」/ 小林佐智子「茶巾袋」/ 加藤令「古筆紗」  
※網袋と仕立てはすべて多清蔵

愛知の工芸2020

数寄屋Café

#出品作家の茶碗で抹茶を提供

愛知の工芸2020の再開催を記念し、数寄屋Caféでは出品作家の茶碗で抹茶セットをお楽しみ頂けます。【別途有料】

## 展覧会情報

展覧会名称

古川美術館 分館爲三郎記念館 両館同時開催  
特別展「再開催！愛知の工芸2020」

会場

古川美術館と分館爲三郎記念館

会期

2020年9月12日（土）～10月11日（日）午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

主催

公益財団法人 古川知足会

後援

愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会  
中日新聞社 CBCテレビ 東海テレビ放送 スターキャット・ケーブルネットワーク株式会社

休館日

月曜日（但し、9/21 9/22は開館は9/23は休館）

観覧料

大人1,000円 高・大学生500円 中学生以下無料

## 【お問い合わせ】

公益財団法人 古川知足会 古川美術館・分館 爲三郎記念館  
電話 052-763-1991 FAX 052-763-1994(学芸課)  
〒464-066 名古屋市千種区池下町2丁目50番地

担当学芸員 林奈美恵 (n\_hayashi@furukawa-museum.or.jp)  
広報担当 学芸課 山内綾子 (a\_yamauchi@furukawa-museum.or.jp)

お問い合わせは古川美術館 学芸課まで 052-763-1991